

# 背徳のメス

2005(平成17)年12月25日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)



監督＝野村芳太郎／原作＝黒岩重吾／出演＝田村高廣／高千穂ひづる／瞳麗子／久我美子／葵京子／山村聡／加藤嘉／城所英夫（松竹配給／1961年日本映画／87分）

特集

日本映画界の至宝、安らかに

……野村芳太郎監督の「病院モノ」第1弾は黒岩重吾の原作。舞台が大阪の阿倍野病院というのが面白いが、東京人にはちと、わかりづらいかも……？ 1961年には珍しい医療過誤事件をベースに医師観の対立、女への不信、そして金と権力への欲望などがドッサリと詰まっているから面白い。それにしても、『背徳のメス』とは何とも意味シンなタイトル……。

## 原作はあの黒岩重吾！

黒岩重吾は『休日の断崖』でデビューし、1960年『背徳のメス』で第44回直木賞を受賞した作家で、私の学生時代その人気は上々のもの。

社会派サスペンス作家としての地位を確立した黒岩重吾の面目躍如たるその作品を野村芳太郎監督が映画化したのがこの映画だから、見ごたえタップリとなるのは当然のこと……。

## この映画の主人公たちとテーマは？

この映画は大阪阿倍野にある阿倍野病院が舞台。そしてこの病院の院長が林（加藤嘉）、産婦人科の責任者が西沢科長（山村聡）、婦長が佐藤信子（久我美子）。そして、たくさんいる若手の産婦人科医師の1人である植秀人（田村高廣）がこの映画の主人公。

この映画のテーマは1960年代としては珍しく、医療過誤事件騒動を含め、病院経営をめぐる金と欲にまみれた人間たちの生態を赤裸々に描いたもの。西沢科長の悪党ぶりをみていると、女遊びにうつつを抜かしている植でも、まだまとも

な医者に見えてくるから不思議なもの……。

## 阿倍野の病院のモデルは……？

大阪阿倍野地区は、私が1984（昭和59）年に阿倍野再開発訴訟を提起し、1審の大阪地裁では敗訴したものの、2審の大阪高裁、そして最高裁で歴史上、学問上画期的な判決を勝ちとった、思い出多い地区。また、1989（平成元）年のバブル絶頂期に大阪府南河内郡美原町（現・堺市）のニュータウンで購入した一戸建て新築住宅から車で通う生活がイヤになった7年後の1996（平成8）年には、結果的に四天王寺のマンションを購入することになったが、阿倍野地区の「億ション」も候補の1つとして物色していたから、あの界隈の雰囲気は私は十分に理解しているつもり。

そんな阿倍野地区にある1950年代の阿倍野病院は、宗教団体の資金で運営されている様子だが、建物は老朽化しているうえ、設備も貧弱で見るからに古そう。したがってその産婦人科を訪れてくる患者（？）たちは、幸せな家庭生活の中でベビーに恵まれた夫婦モノは少なく、本当は優生保護法違反となるはずの墮胎の依頼が多い感じ……。したがって、そんな患者たちの質も下の下……。さて、この阿倍野病院の实在のモデルはどこ……？

## 植をとりまく女たち

植は若手の産婦人科医師ながら、女遊びがひどく放蕩三昧の日々。その相手は商売女だけではなく、今は病院内の看護婦である有吉妙子（瞳麗子）といい仲に。妙子は看護婦向きではない（？）自由奔放な女で、セックス好きだから植との相性はピッタリ……？ しかし同時に、植とベッドインするたびに植のポケットから現金を盗みとるといったたかな一面も……。

妙子の前は同じく看護婦の葉月景子（葵京子）といい仲だったが、景子は植がどうせ遊びにすぎないことを理解し、その反省のうえに今は植との関係をきっぱりと断ち、やっとな結婚ができる状態に……。

ひどいのは、同じ病院で働く薬剤師加納伊津子（高千穂ひづる）への行為。医者には宿直がつきものだが、植は宿直中に外のホテルで馴染みの女といいコトを

するのは日常茶飯事だった。ところが何と今回は、宿直中に同じ宿直中の伊津子の部屋に忍び込んでいき、無理矢理に……。

もっとも、「叫びたかったら叫びたまえ」と植ははっきり言っているにもかかわらず、伊津子は助けを求めなかったのだから、果たしてこれが「強姦罪」となるか否かは微妙……？

この伊津子は寝たきり状態となっている夫の世話をしながら夫への操をたて、1人空閨（くうけい）を守っている女性だった。そのためなおさら植の「攻略本能」に火がついたらしいが、それは伊津子にとっては迷惑このうえない話……。

### 植の女漁りにも正当な（？）理由が……

もっとも、植がこんな風に女漁りに精を出す人間になった理由については、植の弁明にも耳を傾けなければならない。それは、植が幸せの絶頂の中で、ある驚愕すべき事実がわかったこと。

戦後ある大病院に勤めていた植は将来を嘱望された若手医師。院長の姪と結婚し、妻の妊娠を喜んでいたところ、ある日植が自分の精子を調べてみると、何とそれには生殖能力がないことが判明したというわけだ。すると妻のお腹の中の子供は一体誰の子……？

そして、平然と植の子供であるかのような顔をして幸せな夫婦生活を演出している妻の気持は……？

当時、純真だった植の心の中が「女性不信」でいっぱいになったこともうなずけないわけではない。そしてそうであれば、その後、妻のもとを飛び出しおおっぴらに女漁りを始めるようになった植の行動も十分理解でき、同情できるもの……？

### 興味深い、西沢科長の医師観と植の医師観対比

こんな植だったが、医者としての職業上の義務感と倫理観は意外に（？）しっかりしており、仕事面においては病院内の信頼は高かった。さらに大きなポイントは、植はお金によって患者を差別することは許せないという感性をもっていたこと。この点についての植の発言は、今どきの若い医者には是非、聞かせてやりた

いと思うほど……。

これに対して、ベテラン医師で自分の腕に自信をもっている西沢科長は、病院の経営にも関心をもたなければならない立場だが、それ以上に金や権力・名誉に固執するタイプ……？

この西沢科長の医師観が特に悪いと非難されるものではないだろうが、2人の医師観の対比は興味深いはず……。

### 仕方ない死亡、それとも医療過誤……？

阿倍野病院の近くには、某遊廓があるためか、その産婦人科を訪れてくる患者にはあえてあの当時の表現でいえば、「パン助」がいた。そしてそんな患者の依頼はたいていが搔爬（そうは）……。

そんなパン助の光子が今日、緊急に運ばれてきた。植は光子の發育不良の体質では手術に耐えられないと診断し、手術は明日にすべきと主張した。しかし西沢科長は、それを無視して手術を敢行。1度は成功したかにみえたが、結局光子は死亡することに。さて、その死亡はやむを得ないもの、それとも医療過誤……？

### 「インフォームド・コンセント」や「患者の権利」はどこに……？

長年にわたる医療過誤訴訟の積み重ねの中（?）、今や「インフォームド・コンセント」は常識だし、「患者の権利」という概念もかなり確立している。しかし、この映画の舞台となっている1950年代では……？ ましてや、この阿倍野病院では……？ 事前の説明もなされないまま死亡し、何の補償もされないのでは、光子の死は犬死……？

### 意外な展開に

光子はパン助だったが、その光子を心の底から愛していたというヒモの安井（城所英夫）が登場してきたからコトは面倒になり、意外な展開に……。安井は実はヤクザ。そんな安井の要求は慰謝料としての200万円を支払えというもの。1950年代において、その金額がどの程度の妥当性をもっているのかはわからないが、弁護士の感覚では、人一人の命の値段としてそれほどベラボウな金額ではな

いと思えたが……。

## 西沢科長の対応の是非は？

しかし強気の西沢科長は断固これを拒否し、これ以上恐喝行為を続ければ警察に届け出ると反撃した。ここまでの西沢科長の対応は立派なものだが、その後は全然ダメ……。警察での事情聴取あるいは裁判での証言まで射程距離において考えれば、西沢科長の手術の妥当性についての強力な証言が必要。西沢科長はそれを当然のごとく同じ科の医師である植に求めた。

しかし、それに対する植の対応は、西沢科長にとって全く信じられない意外なものだった。

すると老獪な西沢科長は、「今度は冷静に話し合おう」と「ある提案」をもちかけたが、頑固な植はこれも拒否。さすがの西沢科長もこれにはカチンとくることに……。そこで西沢科長のとった第3の方策は……。

## これは一種の人体実験では……？

西沢科長が植に対して仕掛けたワナは、何とも巧妙なもの。すなわち、既に手遅れかもしれない状態で緊急に運び込まれてきた子宮外妊娠の患者の処置を、西沢科長は急病のため執刀できないと偽って、植の手に委ねたのだった。植はこれを拒否することはできず、やむなく数%の可能性を求めて執刀することに。ベテラン婦長の佐藤をしたがえながら、植は見事にその手術を敢行し、一時は成功したかに見えたが、その後患者の容体は急変、結局死亡することに。

こうなれば植と対等とばかりに、西沢科長は植に対し、あの処置がどうのこうのと言いたい放題……。

2人の医師がその手腕の優劣を競うのは勝手だが、患者の生命を賭けてこんな争いを展開するのは、一種の人体実験では……？

それにしても黒岩重吾は、1950年代当時、病院内にホントにこんな実態があることを把握していたのだろうか……？ それを把握していなければ、『背徳のメス』というこの原作に実にピッタリのタイトルも思い浮かぶはずはないと思うのだが……。

## 殺人未遂事件が発生！

今日は病院の創立記念日。そんな記念すべき日に林院長らの長い間の努力が実り、病院建替え計画が発表されたから、病院は二重の喜びに沸きかえり、珍しく西沢科長も酔いつぶれてしまった。もちろん、酒好きの植もグデングデンになって宿直室のベッドにたどりつくや否やボタンキュー……。

たまたま看護婦の景子が「ある用事」でこの部屋を訪れたところ、部屋の中にはガスが充満し、植はほとんど死亡直前……。これは明らかな殺人（未遂）事件。さて、犯人は一体ダレ……？

## 怨みをもつ人間があちこちに……？

人間はやはり普段の行動が大切。昨今はやりの「動機なき殺人」や「通り魔殺人」では何の縁もゆかりもない人間から危害を加えられることになるが、あくまでそれは例外。普段人から怨まれることをしていなければ、その人間が殺人のターゲットにされることはない。しかし、植は……？

植が酔いつぶれて眠っている間に宿直室のガス栓をひねったのは、植を殺すことを狙った犯行。

するとその犯人は、植に怨みをもつ人間……。そう考えるのが当然だが、ここで困ったことは、植に怨みをもつ人間がたくさんいたこと……。第1に植が協力しないことを根にもっている西沢科長。第2に暴力で犯された薬剤師の伊津子。第3にこの伊津子を慕っている薬剤師の斎賀（倉田爽平）。そして第4に植から金を盗んでいたことを指摘されて、今や縁が切れてしまった妙子。さらには既に結婚が決まった第一発見者の景子、あるいは婦長の佐藤信子（久我美子）。こりゃ大変だ。

そこで植はあえて警察に届け出ることを避け、自ら犯人捜しにチャレンジすることにしたが……。

## 大荒れのクリスマスパーティー

今日は阿倍野病院のクリスマスパーティーの日。そんな席で、かつて植の愛人

だった看護婦の景子が職場の仲間と結婚することが報告され、西沢科長からその祝福の言葉が述べられた。植はそれは平然と聞いていたが、そんな席に突然飛び込んできたのが佐藤婦長。

いつも控えめな彼女が珍しく西沢科長のもつグラスに酒を注ぎ、乾杯の音頭を先導することにとまどった西沢科長だが、そこは百戦錬磨のベテランだけに、うまくその場の雰囲気を読みとり、「乾杯」と叫んで、グラスを飲み干した。ところがそこで発生した驚愕の事実とは……？

その意外なてん末についても映画を観てのお楽しみに……。

### 何とも哀しい佐藤婦長の女ゴコロ……

この映画は『ゼロの焦点』と同じ1961年につくられたもの。『ゼロの焦点』では初々しい新妻役で登場し、夫の死亡をめぐる名探偵ぶりをみせた久我美子が、この『背徳のメス』では西沢科長から「オールドミスのかそばあ」と罵られるベテラン婦長を演じている。

病院では医者と婦長との「個人的関係」がよく見られるが、どうもそれは阿倍野病院の産婦人科でも同じだったよう……。もちろん、昔はそうであっても、今はもう切れてしまっていたようだが、あの創立記念日の祝宴でしたたかに酔ってしまった西沢科長は勢いにまかせて(?) すぐ側にいた佐藤婦長に手をのばしたが、あくまでこれは一時のなぐさみもの……。彼女はそんな立場にあることを悟らざるをえなかった。

しかし男の心をひきとめるためには、その男の望んでいることをしてやるのが一番。そう考えた佐藤婦長の決断とは……？ 実は彼女は、あのガス事件の日も宿直日だった……。事件の全貌が見えてくるにしたがって、何とも哀しい女ゴコロを思い知らされることに……。

2006(平成18)年1月13日記